〈仮面〉を生きる文学

［講師］北川透（詩人・批評家）

文学に〈私〉の顔は不要です
作家が自分の実生活をモデルにして作品を書いても
そこには必ず脚色が入り虚構の意識が入ります
それは作家が意識するかどうかとは関係なく
小説を書くという選択をした時に
小説発生以来の時間の流れの中に
入らなければ書けないからです
その時間を〈仮面〉として考えてみました

日時■ 平成30年10月13日（土）13：30 - 16：30

開場■ 13：00 - 17：00

会場■海峡メッセ 下関
（山口県国際総合センター）801 大会議室
■〒750-0018■山口県下関市豊前田町3丁目3-1

受講料■ 3,000円
学生受講料■ 1,000円

お問い合わせ■ 080-3052-3430
■佐藤泰正文化塾運営委員会
■担当■伊豆

佐藤泰正文化塾第四回講演会　〈仮面〉を生きる文学

■講師紹介■

北川透（きたがわ とおる）
詩人・批評家

１９３５年、愛知県碧南市に生まれる。５８年、愛知学芸大学卒業。６２年、『あんかるわ』を創刊し、９０年に終刊するまで、同誌を基盤に精力的な詩と批評の活動を展開する。９１年、下関市に移住し、９６年から２０００年まで、「九」を山本哲也氏と共同編集で刊行。２０１３年から、ひとり雑誌「ＫＹＯ（峡）」刊行。『詩論の現在』（全三巻）で第三回小野十三郎賞、詩集『溶ける、目覚まし時計』で第三十八回高見順賞、『中原中也論集成』で第四十六回藤村記念歴程賞、これまでの詩の実践と現代詩論への寄与で第七十回中日文化賞を受賞。現在「北川透現代詩論集成」全８巻刊行中。評論「谷川俊太郎の世界」など著書多数。はじまりの『あんかるわ』創刊から今日まで、一貫して、詩と批評の言語に内在している潜在的な可能性を肯定し、理論的立場と実践的立場の両側から、困難な時代閉塞の現状に空隙を穿ち、その可能性を押し広げつづけている。

平成２９年７月，わたしたちは「佐藤泰正文化塾」を立ち上げました．

佐藤泰正先生は生前，その最後の最後まで，なにか途方もなく巨きな，語り得ぬものを前にして，あの〈終わりなき講義〉をつづけられました．その〈講義〉には〈終わり〉がありませんでした．無理もありません．なぜなら，このわたしたちの抱えている諸問題に〈終わり〉がなく，また，このわたしたちという存在自身のことですらある諸矛盾自体にそもそも〈終わり〉がないのですから．それゆえ先生は，いつも，その〈講義〉を〈終わる〉に〈終わる〉ことができなかった．先生はこう言っていました．わたしたちはわたしたちの〈矛盾〉を手放してはならないと．その〈両極〉を手放しちゃいけないんだと．口角泡を飛ばして．その〈講義〉はどこまでもつづくようにわたしたちには思われました．あたかも，言葉がその矛盾の果てまで歩き出すかのように．文学とは〈問いかけ〉です．〈せめて問いかけること〉なんだと．いまのような困難な時代にあってこそ，求められるべきは〈文学〉なのですよと．

その場所には，ありとあらゆる人びとが集い，わたしたちはいつも，そこから〈なにか〉を〈はじめる〉ことができたのでした．先生の〈講義〉に〈終わり〉がないほんとうの理由は，そこで，現に，絶えず，〈なにか〉が〈はじまっていた〉からです．他のなにものでもない，わたしのなかにある，わたしたち自身の，実に，多種多様な〈生〉そのものが．

わたしたちは，いまも佐藤先生と共に学び，生きています．「佐藤泰正文化塾」は，あの〈終わりなき講義〉の反復なのです．わたしたちはここで共に学び，わたしたちの〈生〉の糧とし，この歓びを分かち合う友と出会い，ここから，またあたらしい〈なにか〉が〈はじまる〉ことを切に願っています．

佐藤泰正文化塾実行委員会

【佐藤泰正年譜】

1917年（大正6年）	0歳	11月26日、山口県厚狭郡厚狭町大字郡〔現山陽小野田市〕に生まれる。
1934年（昭和9年）	16歳	山口県立豊浦中学校を経て第一早稲田高等学院（予科）文科入学。
1940年（昭和15年）	23歳	3月早稲田大学文学部国文科卒業、直ちに山梨栄和女学校教諭に就任。
1943年（昭和18年）	25歳	6月より、大阪市立北野女子商業学校教諭に就任。
1945年（昭和20年）	27歳	4月、大阪市立西華高等学校高等女学校教諭に就任。 8月15日、終戦。帰郷。 11月梅光女学院に就任。
1946年（昭和21年）	27歳	7月、梅光女学院教諭図画担当の森島京嬢と結婚。 京の父親が始めた「天の家」という孤児院を京とともに手伝う。
1950年（昭和25年）	32歳	梅光女学院中学校長に就任。
1962年（昭和37年）	45歳	『蕪村と近代詩』上梓。
1963年（昭和38年）	46歳	『近代日本文学とキリスト教・試論』上梓。
1967年（昭和42年）	49歳	梅光学院大学文学部の設立が認可され、副学長に就任。
1968年（昭和43年）	51歳	山口県芸術文化振興賞受賞。『文学と宗教の間』、『日本近代詩とキリスト教』上梓。
1969年（昭和44年）	52歳	11月5日下関市教委の学校教育功労者として表彰を受ける。
1971年（昭和46年）	54歳	4月1日、梅光学院大学学長に就任。
1972年（昭和47年）	54歳	11月、早稲田大学より文学博士の学位を受ける。
1974年（昭和49年）	57歳	『文学その内なる神 日本近代文学一面』上梓。
1978年（昭和53年）	60歳	『近代文学遠望』上梓。
1985年（昭和60年）	67歳	『中原中也の詩の世界 』上梓。
1986年（昭和61年）	68歳	『夏目漱石論』、『漱石的主題』（共著・吉本隆明）上梓。
1991年（平成3年）	73歳	『人生の同伴者』（共著・遠藤周作）上梓。
1992年（平成3年）	74歳	『漱石・芥川・太宰』（共著・佐古純一郎）上梓。
1994年（平成6年）	77歳	『佐藤泰正著作集　全12巻別巻1』　刊行開始。
1997年（平成9年）	80歳	宮沢賢治賞受賞。
2000年（平成12年）	82歳	3月末、学長退任。
2008年（平成20年）	90歳	『中原中也という場所』上梓。
2009年（平成21年）	91歳	8月、博多での講演終了後、頭部に違和感があることを告白し即病院へ。診断の結果は　脳梗塞。そのまま博多で入院し、経過を見て下関の病院へ転院。しかし、留学生も加わっている大学院生たちの指導を強く訴え、リハビリを薦める医師の提案を退けて大学へ戻り、ご自宅で授業や執筆が続けられた。〔後に歩行の不自由はあるものの、大学構内での授業、公開講座の講演も復帰された。
2010年（平成22年）	92歳	『文学講義録 これが漱石だ。』上梓。
2013年（平成25年）	95歳	『文学は〈人間学〉だ。』（共著・山城むつみ）上梓。
2015年（平成27年）	97歳	6月、『文学の力とは何か』上梓。 11月30日、召天（享年98歳）。 11月26日（木）大学院生の授業、11月28日（土）の公開講座（アルス梅光）が最終講義となった。院生の授業、学部生との読書会は毎週木曜日に行われた。夏目漱石が弟子らと集う日を木曜日に定め、「木曜会」としていたことに拠ると思われる。